The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ディスカッサントⅠ
Author(s)	瀧口, 剛
Citation	OUFCブックレット. 2014, 5, p. 31-36
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/50100
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ディスカッサントⅠ（瀧口剛）

瀧口と申します。顔見知りの方もおられますが，多くの方が初対面になります。私の専門は日本政治史でありまして，そういった人間が何故ここにいてコメントするのかということですけれども，最大の理由は田中先生が誘いやすかった同僚に声を掛けられたのではないかと思います。ただ 2 番目の理由を考えますと，中国政治史，或いは中国史を専門にしていない人間が両著を読んだらどういう感想を抱くかを聞いてみたいと思われたのではないかと思われます。そこで日本政治史を専攻している人間が，中国政治史に関する叙述を読んでどういう感想を抱いたのかということを中心にお話をさせて頂きたいと思います。

私は日本政治史を専門としている訳ですけども，育ちでいきますと法学部で育ってきました。その中で政治史をやってきたわけですね。しかし中国政治史については十分な知識を得る機会がなかったので，所詮その程度の人間のコメントだと思って頂ければいいかと思います。しかし，1 つ共通することは対象となる地域は異なるけれども「政治史」であるということですね。これはしばしば考えるのですが，政治学の 1 ジャンルとしての「政治史」というのは何なのだろうということですね。これは実を言うと一筋縄ではいかない難しい問題を孕んでると思います。端的に言って政治学と歴史学の間には，緊張関係がある，それを中国政治史の場合で考えるとどうなるかということを少し述べてみたいと思います。

まず両著を読んだ感想を述べたいと思います。西村先生の御本はですね，非常に見事に統一された記述が印象的です。著書全体が非常にシンメトリカルな構図をもっていて，さらに非常に分かりやすい図表が掲載されていて。これを見ながら中の記述を読んでいくと非常に頭に入る，見事な教科書だなと思いました。全体を貫く観点としては恐らく中華民族的国民国家形成史が太い線としてある。その中で 25 年ごとに時期区分がなされている。何に基づいて時期区分しているか，というと「政治空間」という独自な概念を持ち込まれてる。おそらく正統性の問題を非常に重視する結果として「政治空間」

という概念を創出されたのかという気がします。他方でこれは概念なのか，メタファーなのか，読んでいて疑問に思わないわけではないのですけれども，いずれにせよ「政治空間」によって時期区分したことが統一的な記述を可能にしたという感じを受けます。一方，浅野先生と川井先生の編まれた御著書は，様々な研究者が多様なアプローチ，特に社会科学的な分析道具を用いて，個々のテーマについて論じられています。「普遍の中の中国」という問題意識と同時に，中国政治史をめぐる多様な研究状況が分かったことが興味深かったです。

ところで，両著に共通の問題意識としては，革命史観批判があるように思われます。これはひょっとしたら現在の現代中国政治史研究者のコンセンサスなのかなと思います。ここから連続性の問題，時期区分の問題が出て来るということになります。特に印象を受けたのがですね，中華民国と人民共和国という時代を連続性の面で見るということが強く意識されてるようです。この点はまた考えてみたいと思います。もう 1 つは社会科学上の概念がやはり用いられてるということですね。西村先生の本にも持ち込まれてるわけですね。比較政治学的な概念が適用されてるということになります。これは両著も一緒かなと。そういうことを踏まえて少しですね，政治史における連続性の問題や，社会科学的分析の問題を少し考えてみたいと思うんです。

まず時期区分と「連続」「断絶」の問題から。政治史をやるとですね，だいたい区分というのはやることによって概説的になるんですけども，日本の場合は常識的に言うと近世と近代，要するに江戸時代までと明治以降，戦前と戦後ですね。そういう風に大きく言うと区分してますし，私も授業ではこういった区分を用いますけども，これはしかし，断絶してるという議論だけかというと，もちろん，これにチャレンジする議論もいっぱいあるんですね。近世の遺産が近代にどれだけ持ち込まれてるかという議論もいっぱいありますし，戦前と戦後は例えば 1940 年体制論というようにですね，戦時体制の問題とかですね，連続・非連続の問題はしばしば議論になるところであります。この場合ですね，何をもって連続してるか，断絶しているかということになります。これはものの見方で「この観点から見れば連続してる」「こ

の観点から見れば断絶してる」という風になるのは当然なんですけれども，読ませて頂くとですね，1949 年で連続していると言う場合は国民国家化の進行を重視されているようです。しかし，体制の違いを軽く見て良いのか，疑問を感じないわけではありません。何を基準に時期区分をするのかはやはり難しい問題のような気がします。政治制度が異なるとそこで展開されるゲームのルールも違っているはずです。そこを無視すると実証的な研究の発展が逆に阻害される可能性もあるのではないか，このような感想もいだきました。

それから，もう 1 つの問題として。歴史分析と社会科学的分析との関係があります。もちろん，歴史に限らず何の分析でもフレームが必要で，生の事実を並べてですね，そんなものが何の分析にもならないのは当然であります。意識的に社会を比較する場合に出てきたのがですね，歴史社会学の分野ですね。フレームを意識的に作ってですね，比較するということをやってきたんですね。先程言及されましたスコッチポルなんかもそうで，これはしかしですね，歴史学ではないと思うんですね。政治史学，歴史社会学は歴史学ではないと思うんです。「歴史学」は，「歴史社会学」「歴史政治学」（篠原一先生とかはこういう言葉を使われてる）とは少し違う。それは社会科学は一般化する。スコッチポルも一般化してます。別に中国だけを取り上げたんじゃなくてですね。旧体制はどういう場合に崩壊するかという議論をしています。しかし歴史学はですね，私も学生には「史料を読め」と言います。「難しいことを言うより，まず史料から読め」と言いますけれども，これはやっぱり個別化への志向があると思うわけですね。社会科学の一般化への志向と歴史学の個別化思考とには緊張関係がなくならないと思います。だからさよならと言うわけではないんですけども，なくならない。緊張関係は存在する。これは適用する時は意識しておいた方がいいだろうと思います。もう 1 つ歴史学はですね，内在的な分析が必要であるということですね。社会科学における客観化と歴史学的な主観とかを扱う内在的な分析とはですね，やはり緊張関係にあると思っておいたほうがいい。これは解決の付かない問題だと思いますけれども，意識はすべきだろうと思います。

もう 1 つ気になったことを挙げますと，社会科学の概念を使うという時の問題であります。ちょっと感じたんですけど，概念を「当てはめている」という印象を受ける時もあります。これはどうしてかなと考えたんですけど，2 点考えないといけない。1 つはですね，全体主義とか権威主義体制とかですね，こういった概念は元来は問題的な，プロブレマティックな問題であった。冷戦時代というのはこの概念自体が激しい論争の対象になっていたということは，古い先生はご存知だと思います。だから，リベラルな学者はですね，恐らく全体主義って誰も使わなかったと思います。要するにナチズムとスターリニズム，社会主義を一緒にしているから。しかし，これはですね，例えばこの全体主義論の主要な人物であったハンナ・アーレントの思想を考えてみたらいいんですけれども，非常に切実なんですね，20 世紀とは何かを考える時に全体主義という概念が必要だった。もちろんクリティカルにですね，必要だった。非常に切実な問題意識がある。ハンナ・アーレントになると生きるか死ぬかの問題意識だったわけですね。ところが，冷戦期が終わりましてですね，それでも，むしろ全体主義を巡るこういった緊張関係が失われてしまったような気がします。

もう 1 つが純粋に比較の問題ですけども，全体主義もそうですけど，比較するための概念として開発されてきたというものですね。しかしこれはですね，自明ではないと思います。自明ではないと言うと変ですけど，どんな権威のある学説でも自明ではない。だから，当てはまらないものを無理矢理に当てはめてもですね，意味が無い。比較政治学とか比較の社会科学はこういう時にどう対処するかというと，新しい類型を作る。これによって概念自体が革新されてしまう。例えばかつてはウエストミンスター型のデモクラシーが当然だったと思われてた時に，ヨーロッパ大陸のリプレゼンテイティブな代表制の概念というのが，「これがもっとノーマルだ」「例外ではなくてノーマルだ」という説が出て来るとですね，新しい類型論も出て来るんですね。だから，中国も比較の対象となるような新しい類型論ができると面白いなと，そう思ったりもするのであります。

以上はマクロな，一般的な話ですけども，もう 1 つですね，ミクロな分析

というのもやはり重要で，これは政治学上では政治過程論とか政策決定過程論的な話ですけども，これは日本政治史に強い影響を与えていると思います。つまり，これは直感的に分かるところがあるので，日本史の人もこれに近い分析をする。有名な人でいうと坂野潤治さんとかですね。過程論的な分析には実証的な分析，歴史の史料を組み立てていくような分析と親和性があるんだろうと思います。しかし，これは当然，批判もされるところであります。要するに，話がチマチマする。両著でこういう分析があまり見受けられなかった理由は，教科書的に大きく記述しないといけない，あまり前面には出ないのかなという印象を受けました。しかしもう少し重要なことがある感じもします。それは，例えば，毛沢東対蒋介石の二項対立というよりは，多様なアクターが登場し，その間の政治的なゲームが展開されるという話になります。そういった多元主義は現代日本政治分析に古くから言われてきたことですけれども，もっと意識してやった方がいいんじゃないかと思いました。多元的なアクターがあってその間にコアリションと対立のゲームが展開されている。こういう分析がもっと必要ではないかという印象を受けました。この政治過程分析の後ですね，制度論が登場し，そのうち歴史的制度論，合理的選択制度論が政治学分析では出て来るわけですけども。

さらに言えば「制度」については，御著書のなかでも言及されているのですが，もっと精密に分析する余地があるように感じました。歴史的制度論は，例えば福祉国家のメカニズム，何故ある現象がトレンチするのかとかですね，いうのを割と厳密に分析するのにも使われるはずで，やはりこれはキッチリやると良いだろうと思います。そういう意味で言うと，例えば福祉国家論なんかでは制度論はよく使われますけども，読まして頂いて政治経済学的な分析，ポリティカル・エコノミーの分析が欠けているというのが印象です。もちろん経済的な現象は扱われているのですけども，そしてポリティカル・エコノミーは経済学者もやってるし政治学者もやっている分野です。もしやられてないのだったら若い皆さんは挑戦してみるみる価値がある。恐らくこれこそ，本当に中国の体制はですね，市場と旧社会主義の枠組みを使っているので簡単にはいかないと思いますけども，当然，実証分析は出来るだろうと

思います。

予定の終わりまで進んでいないのですけれども, 時間がなくなってしまいました。申し訳ありません。レジメにもあるように 20 世紀の中国における「国民国家」や「権威主義体制」の来歴と今後の展望との関連について，私の方から質問することもしたかったのですが，残念です。

最後にここには若い院生も結構来ておられるようなので, アジテーションをしておわります。教科書は，ある時代のある分野の学問的状況を反映したものです。そこで若い院生諸君には，教科書を鵜呑みにするよりも，チャレンジする気持ちでいて欲しいと思います。例えば西村先生の教科書の統一性のある記述は大変見事だと思うんですけども, そして恐らく生涯をかけた研究の総括もされているんだろうと思って大変感心するんですけども, 若い皆さんはやはり，大変失礼な言い方ながら,「打倒西村」を目標に「こんなんに誤魔化されるな」と思って研究された方が宜しいかと思います。やがてあなた達が歳を取ると，新しく持ち込んだ手法を今度は学生が勉強する。そして打倒誰々と言われるようになって下さい。

水羽：ありがとうございます。私の方で制約したので充分出来なかったところもあるかと思いますが，引き続き金子先生から宜しくお願い致します。